琉球大学学術リポジトリ

第３編　教育　第１章　教育

メタデータ	言語:
	出版者: 読谷村史編集委員会
	公開日: 2012-05-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 里井, 洋一, Satoi, Yoichi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24396

第Ⅲ編　教育

第１章　教育

本校朝礼におけるラジオ体操　　『古堅尋常高等小学校 学校要覧』1939（昭和 14）年より

第1章　教員と児童

概説
第1節　読谷山小学校単独時代
表Ⅲ-1-01　就学の学齢と非学齢人員《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
表Ⅲ-1-02　就学人の年齢《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
表Ⅲ-1-03　小学校と教授者生徒《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
表Ⅲ-1-04　小学教授者の類別《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
表Ⅲ-1-05　小学教授者の年齢と勤務年限《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
表Ⅲ-1-06　小学の卒業生徒《読谷山、沖縄県 1883》
表Ⅲ-1-07　小学の中途退学生徒《読谷山、沖縄県 1883》
表Ⅲ-1-08　小学の卒業生徒《読谷山、沖縄県 1890～1892》
表Ⅲ-1-09　小学の中途退学生徒《読谷山、沖縄県 1890～1892》
表Ⅲ-1-10　公立小学校《読谷山 1911～1915》
表Ⅲ-1-11　公立小学校費の収入《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
表Ⅲ-1-12　公立小学校費の支出《読谷山、沖縄県 1883、1890～1892》
第2節　読谷山間切3小学校時代

概説

本章は、『沖縄県統計書』から読み取れる近代読谷山村における近代教育がどのようなものであったのかをみていく。『沖縄県統計書』には、日本政府が設立した近代学校、すなわち児童・教員・学校に関する統計が記されている。ただし、1883（明治16）年、1890～92（明治23～25）年、1911（明治44）年、1913～15（大正2～4）年の統計しか記されていない。

上記のような制約条件があることを踏まえて、戦前の読谷山の学校教育に迫るために下記の手法で、児童・教員・学校を分析することにした。

1、表そのものからみえること

① 表にあるデータ、そのものから何がみえるか。みえないか。

② 表にあるデータを、ある視点でグラフ化することによって何が見えるか。また何がみえないか。

2、表に別のデータを加味することによってみえること

①『沖縄県統計書』以外の統計を加味し、グラフ化することによって見えることとその限界。

② 上記の方策によって作られたグラフに、新聞や手記などの文書史料を加味することによって見えること。

統計資料を分析する前に、戦前における読谷山村の学校教育史の概略をみておくことにする。

日本における近代教育は1872（明治5）年に発布された「学制（がくせい）」に始まる。この学制において、小学校を義務教育と規定し、6～9歳を下等小学、10～13歳を上等小学と分け、各4年を就業年限（しゅうぎょうねんげん）とした。この6～13歳の8年間を学齢（がくれい）といい、学齢人口が学校に通っている百分率を就学率という。1873（明治6）年の日本全体の就学率は28.1%、1878（明治11）年には41.3%となっている。

1879（明治12）年、琉球処分（りゅうきゅうしょぶん）が行われた年は学制にかわり教育令が公布された年でもあった。

教育令は地方の実状を考慮し、16か月の義務制に短縮するなど地方の自由を認めた内容であった。しかし、あくる1880（明治13）年には、就学義務を3か年に延長し、修身（しゅうしん）を学科の最初に置くなど、国家統制が強いものに改正された(改正教育令)。沖縄にはこの改正教育令によって、近代教育が行われることとなった。

1881年、普天間に中頭小学校が設置され、中頭郡下の近代教育が始まる。中頭小学校には、強制的に中頭郡下の間切吏員（まぎりりいん）の子弟や文子（ティクグ）（下級間切役人）が勧誘され、合計21名が生徒となった。しかし、中頭郡に1校では教育の普及は難しいということで、1882年、中頭小学校は廃止され、各間切に小学校1校が設置されることになった*1。読谷山間切にも設置された。それが読谷山小学校である。

読谷山小学校は喜名にある番所の中に設置され、1883年には喜名村に校舎が新設された。改正教育令にもとづき、初等・中等・高等が置かれ、1884年初等科から3名の卒業生が出て、全員中等科へ編入されている。1886（明治19)年初等科卒業生7名中5名は読谷山間切番所文子に就職している*2。この年、日本全国では小学校令が公布され、4年生の尋常（じんじょう）小学校と

読谷山小学校校地校舎平面略図
資料：『昭和十一年度学校経営案』中頭郡読谷山尋常高等小学校、昭和12年1月15日発行より作成

*1. 沖縄県教育会『沖縄県教育 - 学制頒布五十年記念』1922年、117頁、以下『沖縄県教育』。
*2. 下茂門哲『創立50周年記念誌』読谷山尋常高等小学校、1933年、12頁、以下『記念誌』。

高等小学校に分離された。しかし、沖縄県に適応されたのは1888（明治21）年からであった。

小学校令により、1888年、読谷山小学校は読谷山尋常小学校となり、あらたに普天間に中頭高等小学校を設けることとなった。中頭高等小学校には各小学校の中等科の生徒を収容することとなり、その数は数百名に達したという*3。

1892（明治25）年、読谷山尋常小学校は、校舎が改築され、43坪の校舎が103.5坪と広くなっている。

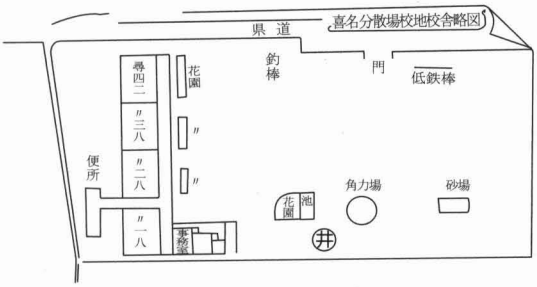
1895年、渡慶次と古堅に分校が設置され、1897（明治30）年には高等科が読谷山小学校に設置された。これにともない、1898年増築が行われ、校舎面積は112坪となった。

1902（明治35）年、渡慶次・古堅両分校は尋常小学校として独立した。

1907年、小学校令が改正され、尋常科は4年から6年となり、高等科は4年から2年となった。

1911（明治44）年、読谷山尋常高等小学校は喜名から座喜味に移転し、喜名にあった校舎は喜名分教所として使われることとなる。移転してできた校舎の面積は135坪であった。

1918（大正7）年、古堅尋常小学校に高等科が併置されることになった。



喜名分散場校地校舎略図
資料：前頁「読谷山小学校校地校舎平面略図」に同じ

第1節　読谷山小学校単独時代

1882（明治15）年読谷山小学校が設置され、1895（明治28）年、渡慶次、古堅に分校が設置されるまでの時代を「読谷山小学校単独時代」として考察する。

児童に関する『沖縄県統計書』の初期の関心はどれだけの子どもが学校に来ているかという就学率の問題につきる。

▼就学率

表Ⅲ-1-01をみていただきたい。上段に「学齢人の就学不就学」という項目がある。1879（明治12）年の教育令によると、学齢は6歳より13歳までの8か年と定められている。ちなみに戦後は学校教育法によって、学齢は6歳から15歳までとなっている。したがって「学齢人の就学不就学」という項目の内、就学は小学校に入学した人数、不就学は小学校に入学していない人数、総数は学齢人数ということになる。

その右隣の「学齢総数百人に付ての就学」は、就学率といわれるもので、学齢人の総数に対する就学者の割合を百分率で表したものである。学齢就学者の地域間比較を行なうときの指標となる。

▼1883（明治16）年の就学率からみえること

まずは、表Ⅲ-1-01から、読谷山間切、沖縄県の就学率を考えてみたい。その違いが一目で分かるように作成したグラフが図1である。

1883年時点で、読谷山間切の就学率は1.43％、沖縄県全体の就学率は2.46％である。したがって、読谷山間切の就学率は沖縄県全体の約6割の就学率でしかない。この時点での就学者の年齢構成がわかる統計が表Ⅲ-1-02である。表Ⅲ-1-02から、読谷山間切と沖縄県の学齢就学者の年齢構成比を比較したグラフ

*3. 前掲『沖縄県教育』、117頁。

表Ⅲ-1-01　就学の学齢と非学齢人員《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

単位：人

		学齢人ノ就学不就学			学齢総数百人ニ付テノ就学	就学学齢人			就学学齢ノ男百人ニ付テノ女
		就学	不就学	総数		男	女	総数	
読谷山	1883（明16）	28	1,931	1,959	1.43	28	－	28	－
	1890（　23）	145	1,784	1,929	7.51	115	30	145	26.08
	1891（　24）	156	2,209	2,365	6.60	130	26	156	20.00
	1892（　25）	132	1,966	2,098	6.46	113	19	131	16.81
沖縄県	1883（明16）	1,678	70,493	72,171	2.46	1,676	2	1,678	1.75
	1890（　23）	11,322	64,559	75,881	14.92	9,199	2,123	11,322	23.08
	1891（　24）	11,361	63,928	75,289	15.09	9,142	2,219	11,361	24.27
	1892（　25）	12,368	59,391	71,759	17.24	10,234	2,134	12,368	20.84

下段に続く

		就学非学齢人			就学非学齢男百人ニ付テノ女
		男	女	総数	
読谷山	1883（明16）	20	－	20	－
	1890（　23）	41	－	41	－
	1891（　24）	17	4	21	23.53
	1892（　25）	74	5	79	5.95
沖縄県	1883（明16）	836	1	837	2.17
	1890（　23）	2,108	71	2,179	3.37
	1891（　24）	2,754	215	2,969	7.81
	1892（　25）	1,855	112	1,967	6.04

が図2である。沖縄県平均の場合は、6歳から10歳にかけて暫時（ざんじ）増えていき、11歳から13歳にかけては微増するという傾向を読み取ることができる。それに対して、読谷山間切の場合は、6歳と8歳に2人ずついて、9歳・10歳生徒の就学率が多く沖縄平均を凌駕（りょうが）している。その一方11歳・12歳・13歳の児童は沖縄平均よりはるかに少ない。

表Ⅲ-1-03によれば、1883年読谷山間切にあった学校は公立学校が1つ、教授者は1人、生徒数は48人である。生徒の内訳は表Ⅲ-1-02によれば、13歳未満の就学学齢人は28人、14歳以上の就学非学齢人は20人である。図2から、読谷山間切の14歳以上の就学非学齢人の割合は沖縄平均よりも低いことが読み取れる。ちなみに就学非学齢人とは、学齢を越えたにも関わらず小学校に就学している生徒をさしている。

表Ⅲ-1-03に登場する読谷山間切の公立学校とは読谷山小学校のことである。『創立50周年記念誌』（以下『記念誌』）によれば、読谷山小学校は、1882年3月27日読谷山間切番所に

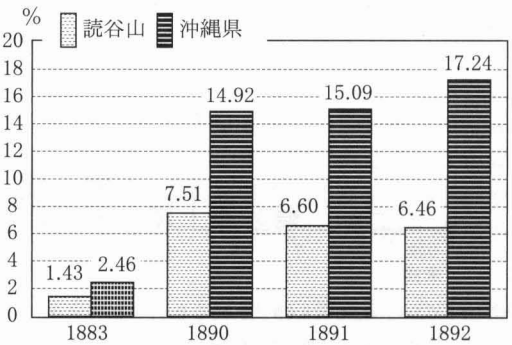


図1　就学率の推移
（読谷山間切と沖縄県全体比較）
資料：表Ⅲ-1-01より作成

表Ⅲ-1-02　就学人の年齢《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

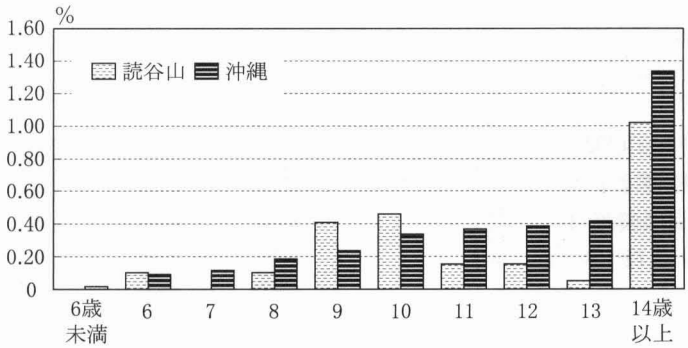
		年齢											
		6歳未満		6歳		7歳		8歳		9歳		10歳	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
読谷山	1883（明16）	－	－	2	－	－	－	2	－	8	－	9	－
	1890（　23）	－	－	3	－	5	2	6	2	7	5	12	5
	1891（　24）	－	－	4	－	15	－	19	－	18	3	25	3
	1892（　25）	－	－	5	－	12	－	17	2	15	3	21	4
沖縄県	1883（明16）	12	1	65	1	83	1	133	－	170	－	242	－
	1890（　23）	70		534		1,030		1,277		1,534		1,773	
	1891（　24）	104		566		1,071		1,411		1,572		1,786	
	1892（　25）	67		672		1,063		1,400		1,623		1,655	

下段に続く

		年齢									
		11歳		12歳		13歳		14歳以上		合計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
読谷山	1883（明16）	3	－	3	－	1	－	20	－	48	－
	1890（　23）	8	4	30	5	44	7	41	－	156	30
	1891（　24）	19	5	8	6	22	9	17	4	147	30
	1892（　25）	16	3	7	3	20	4	74	5	187	24
沖縄県	1883（明16）	265	－	278	－	300	－	964	－	2,512	3
	1890（　23）	1,784		1,678		1,712		2,109		13,501	
	1891（　24）	1,663		1,573		1,461		3,123		14,330	
	1892（　25）	1,689		1,954		1,985		2,227		14,335	

注 1）沖縄県 1890 ～ 92 年は、「男」「女」の区別がない。

創立され、創立時の学齢児童数は 1562 名、就学児童は 30 名で就学率は 1.92 と記されている*4。この『記念誌』と表Ⅲ-1-01 の学齢児童数すなわち学齢人 1959 名、就学人 28 名、就学率 1.43 と比較してみてみると、あくる 1883（明治 16）年になって、学齢人が 400 名



	6歳未満	6	7	8	9	10	11	12	13	14歳以上
読谷山	0.00	0.10	0.00	0.10	0.41	0.46	0.15	0.15	0.05	1.02
沖縄	0.02	0.09	0.12	0.18	0.24	0.34	0.37	0.39	0.42	1.34

図2　学齢就業者の年齢構成比（読谷山間切と沖縄県平均比較）
資料：表Ⅲ-1-02より作成

*4. 前掲『記念誌』、11 頁。

表Ⅲ-1-03　小学校と教授者生徒《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

		学校			教授者			生徒		
		公立	私立	総数	公立	私立	総数	公立	私立	総数
読谷山	1883(明16)	1	－	1	1	－	1	48	－	48
	1890(　23)	1	－	1	3	－	3	136	－	136
	1891(　24)	1	－	1	3	－	3	177	－	177
	1892(　25)	1	－	1	3	－	3	198	－	198
沖縄県	1883(明16)	52	－	52	88	－	88	2,515	－	2,515
	1890(　23)	101	1	102	195	2	197	11,649	89	11,738
	1891(　24)	103	－	103	205	－	205	12,512	－	12,512
	1892(　25)	101	－	101	215	－	215	12,535	－	12,535

下段に続く

		一校に対する生徒		教授者一人に対する生徒	
		公立	私立	公立	私立
読谷山	1883(明16)	48	－	48	－
	1890(　23)	136.00	－	45.33	－
	1891(　24)	177.00	－	59.00	－
	1892(　25)	198.00	－	66.00	－
沖縄県	1883(明16)	2,177	－	1,549	－
	1890(　23)	115.08	89.00	59.74	44.50
	1891(　24)	121.48	－	61.03	－
	1892(　25)	124.11	－	58.30	－

近く増えたことになる。

統計上は学齢児童数が増えたにも関わらず、学齢の就学者は2名減少し、そのため就学率も1.92から1.43へと減少している。

『記念誌』には、創立時に就学した2人の回想録が記載されている。1人は照屋梅岸（てるやばいがん）であり、1人は比嘉保彦（ひがやすひこ）で、ともに上地の出身である。2人は1868（明治1）年生まれの同い年で、読谷山小学校創立の1882（明治15）年には15歳の就学非学齢人であった。

照屋梅岸は30名の生徒の多くは「旧字（あざ）学校」で学んだ素養（そよう）ある者で9歳位から16～17歳位であったと述べている(『記念誌』61頁)。このことから30名の中に就学非学齢人である14歳以上の児童が含まれていることがわかる。『記念誌』に記載された1882（明治15）の学童30名、就学率1.92は誤りであり、実際の学齢（6～13歳）の数は30名より少なく、したがって就学率も低く、1883年統計が示している28名という学齢の就学人は減少ではなく、増加したものであると推測できる。

1882年、創立時点で就学率が問題ではなく、ともかく新しい学校に生徒を入れることが最大の使命であったことが次の比嘉保彦の回想録からも窺（うかが）うことができる。

「かかる折しも就学の命令上より下りてはさながら毒薬を強らるるやうな思ひをなし絶対に断りましたが、父は決して赦（ゆる）さず後日如何にかせやうとも今はと従ひました。ところが学校に初入に其の日思ひもよらぬ御馳走（当時民間稀な御馳走）素麺の御吸物で歓迎されたので大いに喜び色々の御奨励（ごしょうれい）も全く身にしみ学校がこんなに私を愛して下さると中心から感じました。」*5

比嘉保彦がいう「色々の御奨励」とは、毎年麦2俵ないし3俵が就学者に対して与えられた*6ことを言う。

照屋梅岸が先に述べたように30名の生徒の

*5. 前掲『記念誌』、65頁。

*6. 同上、11頁。

表Ⅲ-1-04　小学教授者の類別《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

		公立					私立				
		訓導		准訓導	受業生及助手	総数	訓導		准訓導	受業生及助手	総数
		卒業証書ヲ有スル者	教員免許状ヲ有スル者				卒業証書ヲ有スル者	教員免許状ヲ有スル者			
読谷山	1883（明16）	1	－	－	－	1	－	－	－	－	－
	1890（　23）	－	1	－	2	3	－	－	－	－	－
	1891（　24）	－	1	－	2	3	－	－	－	－	－
	1892（　25）	1	－	－	2	3	－	－	－	－	－
沖縄県	1883（明16）	15	39	－	34	88	－	－	－	－	－
	1890（　23）	80	35	－	80	195	－	－	1	1	2
	1891（　24）	83	40	－	82	205	－	－	－	－	－
	1892（　25）	79	51	－	85	215	－	－	－	－	－

多くは「旧字学校」で学んだ素養ある者である。「旧字学校」は 1879（明治 12）年末頃までは続いていたと照屋梅岸は述べている[*7]。この記述が正しいとするならば、1880 年から 1882 年まで読谷山間切には学校がなかったことになる。

また、比嘉保彦は学校に入ることが嫌であった理由を次のように述べている。

「其当時村で学問した人は皆見上げた大家持の方々で、そして首里詰の御奉公人でしたが、廃藩置県の世の変遷に依り御殿殿内の御奉公は廃止され、内に帰ることになり、郷里にては閑に任せて種々の模合を起こしましたが、其結果皆破産になり、友達兄弟にも累を及ぼし、妻子までもちりぢりになるありさまになつて、世の人々は之をみて、ああ学者の末路、旧御奉公人の末路よ、筆の光は鉾の先などと一種の嫌忌を抱きました。」[*8]

比嘉保彦が述べたことの裏には次のような背景があった。廃藩置県前は、百姓身分の者が学問をするために首里那覇の御殿・殿内に奉公した。御殿とは読谷山間切でいえば読谷山按司のことをさす。また、殿内とは総地頭のことを指し、読谷山間切でいえば座喜味親方のことをさし、三司官をも輩出する家であった。御殿・殿内に奉公した奉公人たち（学者）は、御殿・殿内によって、間切の役人に推挙され、間切役人就任以後も御殿・殿内と関係を持ち続けるという世界が展開していた[*9]。

廃藩置県によって御殿・殿内奉公による統治システムは崩壊した。この結果、御殿殿内の奉公人は間切に帰り、閑に任せて模合をおこし、そのため破産没落したという状況を比嘉保彦は見聞したというのである。それゆえに学問することは一族を没落させることにつながると考えた比嘉保彦は学校に入ることが嫌であったのであろうか。

照屋梅岸がいうように、1880（明治 13）年から 1882 年に読谷山小学校ができるまで「旧字学校」の活動はほんとうになかったのであろうか。

上杉県令が 1881（明治 14）年 12 月 2 日、読谷山間切番所に巡回してきて、村学校（旧字学校）が読谷山間切にもあるかと聞いた。それに対して、間切役人は村学校は村々にあり、御教条などの教科があると答えている。このことから、旧字学校は 1881 年の 12 月時点で存在していたということになる。ただし、旧字学校がなおも出世のための学習の場として機能していた可能性は比嘉保彦が述べたように薄いように思われる。

また、上杉県令は間切役人に学校設置がどの

*7. 同上、61 頁。

*8. 前掲『記念誌』、65 頁。

*9. 里井洋一「解説羽地と地方役人」名護市史資料編 5「羽地地方役人関連資料」、2005 年。

表Ⅲ-1-05　小学教授者の年齢と勤務年限《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

		年齢					勤務年限				
		30年以下	40年以下	50年以下	60年以下及以上	合計	3年未満	3年以上	5年以上	10年以上	合計
読谷山	1883(明16)	1	−	−	−	1	1	−	−	−	1
	1890(　23)	3	−	−	−	3	1	−	2	−	3
	1891(　24)	2	1	−	−	3	2	−	1	−	3
	1892(　25)	2	1	−	−	3	−	2	1	−	3
沖縄県	1883(明16)	79	5	4	−	88	63	8	8	3	82
	1890(　23)	185	11	1	−	197	121	33	36	7	197
	1891(　24)	181	22	2	−	205	113	37	42	13	205
	1892(　25)	191	22	2	−	215	140	27	38	10	215

ようになっているのかとたずねた。それに対して、今年中に本校を下知役場(琉球王府時代、首里王府から派遣されてきて、間切行政にたずさわった官僚を下知役といい、その役所を下知役場といった）に仮設する予定であり、分校は来年から毎年1校ずつ設立する予定だと答えている。つづけて上杉は本校の生徒は何人くらいになるのかと尋ねた。間切役人はおよそ30人と答えている。上杉はこれまでの村学校は不都合であるという認識を示し、近代学校設立のため10円を読谷山間切に寄付している。また上杉は学校設立のために、10円以下を寄付した者13名を呼び出し、褒詞を与えている*10。

1890 ～ 1892年の就学率からみえること

図1に戻って、今度は1890（明治23）～1892年の就学率をみてみよう。1883（明治16)年と比較すると1890-92年は沖縄県平均・読谷山間切ともに就学率は上昇している。

沖縄県全体と読谷山間切を比較した就学率グラフ図3をみていただきたい。沖縄県の場合は毎年上昇を続け、特に1888（明治21）年～89年にかけて急上昇していることがわかる。

この急上昇を淺野誠は小学校令（1886年）に基づく尋常小学校を設置することが困難な地域で簡易小学校（修業年限3年以内・4教科・1日2～3時間の授業）が各地に設置されたからであるという*11。

一方読谷山間切は1890年時点で就学率は7.51％、沖縄県平均の約半分である。91年には6.5％、92年には6.46％と沖縄県平均とは逆に減少し、沖縄平均の3分の1に近い低さであった。たしかにこの時点で読谷山間切には、簡易小学校は設置されてはいない。就学率と学校の収容能力とは密接な関係がありそうである。

女子の就学率

読谷山間切の女子の就学率についてみてみよう。表Ⅲ-1-02によると、1883年には女子の

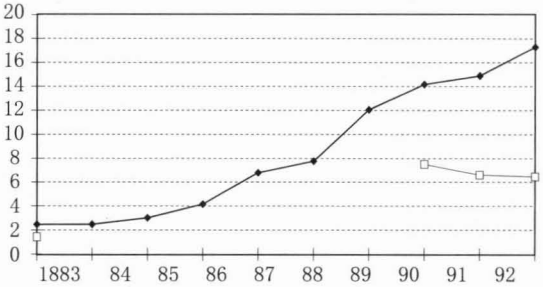


図3　沖縄県と読谷山間切の就学率比較
資料：表Ⅲ-1-01および太田朝敷『沖縄県政五十年』(選集上60-62頁)より作成

*10.「上杉県令巡回日誌」、『沖縄県史』第11巻、52頁。
*11. 前掲『沖縄県教育』、149頁。

表Ⅲ-1-06　小学の卒業生徒《読谷山、沖縄県 1883（明 16）》

		初等		中等		高等		総数	（公立／私立）学校生徒百人ニ付テノ比例
		男	女	男	女	男	女		
読谷山	公立	－	－	－	－	－	－	－	－
	私立	－	－	－	－	－	－	－	－
沖縄県	公立	65	－	－	－	－	－	65	2.58
	私立	－	－	－	－	－	－	－	－

資料）最後の項目「…百人ニ付テノ比例」は、「公立」の項は「公立学校生徒百人ニ付テノ比例」、「私立」の項は「私立学校生徒百人ニ付テノ比例」となっている。

就学者はなく、1890・91 年は 30 人、92 年は 24 人が女子の就学者である。内学齢は表Ⅲ-1-01 によると 30 人→ 26 人→ 19 人と減少している。

また、表Ⅲ-1-02 にみるように 1890（明治 23）年に 7 歳で入学した女子 2 人が、1891 年には 8 歳になったはずなのに統計上では就学していない

知花英康（ちばなえいこう）は 1891 年の入学で、「私たちの時から始めて四名の女生徒がいっしょに卒業した。」*12 と言っている。4 名の女生徒の名はツル・カメ・マカ・ゴゼであった。

このことからこの表Ⅲ-1-01 の時期、すなわち 1890 ～ 1892 年頃には、女子生徒は就学するがその多くは途中で退学していたと考えることができよう。ただし、この統計の中には、いつ入学したかはわからないが、知花英康といっしょに卒業した 4 人の女子生徒がいたと思われる。

表Ⅲ-1-09「小学の中途退学生徒」によれば、読谷山間切では 1890 年、1892 年とも中途退学生徒は統計上、記されていない。しかし、上記にみるようにいなかったわけではないと考えることができよう。

卒業生

表Ⅲ-1-06 にみるように 1883（明治 16）年卒業生はいない。『記念誌』によれば、前述したように初めて初等科（後述）の卒業生 3 名を出したのが 1884 年である。その後、1886（明治 19）年の初等科卒業生 7 名中 5 名は読谷山間切番所の文子となっている。

表Ⅲ-1-08 をみていただきたい。1890（明治 23）～ 1892 年にかけての卒業生徒統計である。簡易・尋常・高等と 3 つに分類されている。簡易・尋常・高等はそれぞれ小学簡易科と尋常小学校と高等小学校を指している。この区分は前述したように、1886 年に公布され、沖縄では 1888（明治 21）年から適応された小学校令によって登場している。小学校令第四条は「父母後見人等ハ其学齢児童ノ尋常小学科ヲ卒ラサル間ハ就学セシムヘシ」と尋常小学校就学の義務を父母後見人に負わせるものであった。小学簡易科（修業 3 年以内）は尋常小学校を設置できない事情のある地域で設置を許された。

表Ⅲ-1-08 にみるように、1890 年、沖縄県全体では、尋常小学校の卒業生は 594 人、生徒数に対する卒業生の割合はわずか 5.1％であったことがわかる。読谷山間切ではさらにひくく、読谷山間切における尋常小学校卒業生の生徒百人に対する割合では 3.67％であった。先に女子の中途退学者を問題にしたがこの時期沖縄県全体で卒業できるものはわずかであった。

卒業生の割合は 1891 年、沖縄県 4.97％、読谷山間切 9.94％、1892 年沖縄県 6.57％、読谷山間切 6.24％と読谷山間切が沖縄県平均

*12. 前掲『記念誌』、59 頁。

表Ⅲ-1-07　小学の中途退学生徒《読谷山、沖縄県 1883（明 16）》

		初等		中等		高等		総数	（公立／私立）学校生徒百人ニ付テノ比例
		男	女	男	女	男	女		
読谷山	公立	－	－	－	－	－	－	－	－
	私立	－	－	－	－	－	－	－	－
沖縄県	公立	132	－	－	－	－	－	132	5.24
	私立	－	－	－	－	－	－	－	－

資料）最後の項目「…百人ニ付テノ比例」は、「公立」の項は「公立学校生徒百人ニ付テノ比例」、「私立」の項は「私立学校生徒百人ニ付テノ比例」となっている。

に対して高いようにみえる。しかし、前述したように、沖縄県平均に比較して就学率そのものが半分以下であり、図 4 にみるように全学齢人口に対する卒業生の割合は沖縄県平均よりもやはり低いのである。

また、1892 年高等科を男子 2 人が卒業しているが、読谷間切に高等科が設置されるのは 1897（明治 30）年であり*13、普天間に開設されていた中頭小学校高等科を卒業したものと思われる。

▼教員

1883（明治 16）年前後

読谷山小学校は 1882 年 3 月 27 日に創立された。赴任した教員は佐賀県出身の吉村喜平次であった。吉村が話す言葉は子供達は理解できず、日本語を読谷山の言葉になおす通訳として喜瀬（きせ）某を月 2 円で雇った*14。校舎は喜名番所の物置小屋が使用され、教師がヤマト人だったので学校はヤマト屋（ヤー）と呼ばれたという*15。

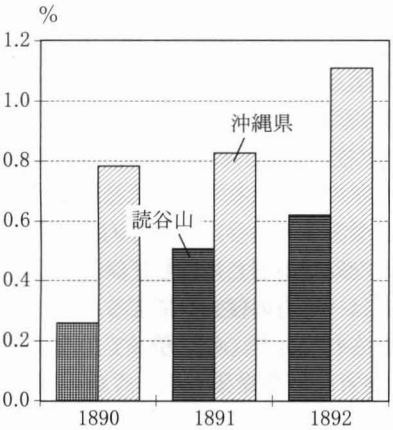


図4　卒業生の割合

あくる 1883 年 3 月 3 日、新校舎が喜名に設立された。敷地は 480 坪、2 教室で 28 坪、その他に 15 坪の建物があった。この新校舎に赴任してきたのが、松元維栄（まつもといえい）であった。松元は 1882 年師範学校に入学し、1883 年初等師範学科を 1 年で卒業するとともに附属小学校訓導（くんどう）となった。松元が読谷山小学校に赴任した時は 21・2 歳であったという。『沖縄県統計書』表Ⅲ-1-05「小学教授者の年齢と勤務年限」（読谷山、沖縄県）をみていただきたい。30 歳以下経験年数 3 年未満の教授者が 1 人いる。これが松元をさしていることは明らかである。松元は師範学校教則大綱（明治 14 年 8 月 19 日達第 29 号）「第九条師範学校ノ修業年限ハ初等師範学科ヲ一箇年トシ中等師範学科ヲ二箇年半トシ高等師範学科ヲ四箇年トス」に基づき小学校初等科のみ指導できる資格を有している。師範学校教則大綱第 3 条には初等師範学科では修身、読書、習字、算術、地理、物理、教育学学校管理法、実地授業及唱歌、体操などの教科を学ぶことになっていた。

松元赴任に際しては、迎えの人夫が遣わさ

*13. 前掲『記念誌』、13 頁。
*14. 前掲『記念誌』、11 頁。
*15.『沖縄教育 31 号』、85 頁。

表Ⅲ-1-08　小学の卒業生徒《読谷山、沖縄県 1890 ～ 1892》

			簡易		尋常		高等		総数	（公立／私立）学校生徒百人ニ付テノ比例
			男	女	男	女	男	女		
読谷山	1890（明23）	公立	－	－	5	－	－	－	5	3.67
		私立	－	－	－	－	－	－	－	－
	1891（　24）	公立	－	－	12	－	－	－	12	9.94
		私立	－	－	－	－	－	－	－	－
	1892（　25）	公立	－	－	11	－	2	－	13	6.57
沖縄県	1890（明23）	公立	33	－	541	20	－	－	594	5.10
		私立	－	－	－	－	－	－	－	－
	1891（　24）	公立	16	－	581	16	9	－	622	4.97
		私立	－	－	－	－	－	－	－	－
	1892（　25）	公立	70	－	651	34	27	－	782	6.24

資料）最後の項目「…百人ニ付テノ比例」は、「公立」の項は「公立学校生徒百人ニ付テノ比例」、「私立」の項は「私立学校生徒百人ニ付テノ比例」となっている。

れ、白髪の地頭代（じとうだい）以下間切役人の出迎えと歓待を享受（きょうじゅ）した。『沖縄県統計書』表Ⅲ-1-03によれば、松元が赴任した1883年、生徒の数は48人である。松元は生徒の数は44～5名で、8～9歳から17～18歳の生徒たちであったと記している*16。また照屋梅岸ももっとも低年齢の生徒は9歳位であった記としている*17。このことから表Ⅲ-1-02にみる6歳の男生徒2人に関しては、疑問がのこる。

松元は、読谷山小学校に赴任した時の様子を次のように述べている。「生徒は総員四四・五名でしたが、中頭郡で一番生徒の多い所でした。その年齢は八・九歳より十七・八年のもので、教授訓練上、大に困難をした。而して試験ごとに級が分かれ、六級から一級までなった時には甚だ困難で、兎に角各級一日に五回づゝ教授さへすれば、退散せしむる様にして、別段休憩時間退散時間を定めずして、日暮まで教授したのである」。初等科は6級から1級へ春と秋に試験を受けて進級していくことになっているから、順調に進級して3年かかることになる。松元は上記にみるように、試験によって、6級から1級までにふりわけ、1人で各級を指導する困難さを回顧している*18。この困難な状況は補助教員として1884（明治17）年12月池原新吾（いけはらしんご）が赴任するまで続く。

『沖縄県統計書』表Ⅲ-1-04「小学教授者の類別」（読谷山、沖縄県）をみてみよう。訓導は正規の教員のことである。「卒業証書を有する者」とは師範学校を卒業した者のことをいう。「教員免許状を有する者」とは1880（明治13）年の改正教育令、1881年「小学校教員免許状授与方心得」による学力検定によって府知事県令から正式の免許を発行されたものを言う。したがって、『沖縄県統計書』は、松元を、師範学校を卒業した卒業証書を有する訓導と把握していたといえよう。

また、「小学校教員免許状授与方心得」は准訓導を一部教科の免許状を有する者と規定している。また、受業生・助手は、訓導・准訓導に附属し、授業を助ける者と規定している。受業生の学力検定は「地方の便宜」によるとし、都道府県に一任されていた。したがって、池原新吾は補助教員すなわち受業生もしくは助手であったと考えられる。

池原新吾が赴任した1884年12月、初等科

*16. 同上、85頁。
*17. 前掲『記念誌』、61頁。
*18. 前掲『沖縄教育31号』、85頁。

表Ⅲ-1-09　小学の中途退学生徒《読谷山、沖縄県 1890 ～ 1892》

			簡易		尋常		高等		総数	（公立／私立）学校生徒百人ニ付テノ比例
			男	女	男	女	男	女		
読谷山	1890（明23）	公立	－	－	－	－	－	－	－	－
		私立	－	－	－	－	－	－	－	－
	1892（　25）	公立	－	－	－	－	－	－	－	－
沖縄県	1890（明23）	公立	116	22	353	89	99	1	680	5.84
		私立	－	－	35	－	－	－	35	39.77
	1892（　25）	公立	164	148	469	287	126	1	1,195	9.53

資料）最後の項目「…百人ニ付テノ比例」は、「公立」の項は「公立学校生徒百人ニ付テノ比例」、「私立」の項は「私立学校生徒百人ニ付テノ比例」となっている。

3名の卒業生がいずれも中等科に編入されたと『記念誌』*19 に記載されている。松元は初等師範学科を卒業し、初等科の指導資格しかなかったはずである。まして補助教員である池原にも指導資格があるはずはなかった。

表Ⅲ-1-12「公立小学校費の支出」（読谷山、沖縄県）をみていただきたい。1883（明治16）年の教授者の給料は101円、その他諸給料は45円となっている。松元は年俸108円で読谷山小学校に転勤したという*20。統計と本人の記録との間に、若干の食い違いがある。

1890（明治23）～1892年

松元は1886（明治19）年美里小学校に転じ、後任に平田鉉之丞が赴任した。平田は1887（明治20）年9月北谷小学校の訓導をも兼務し、12月首里小学校訓導に転じた*21。その後、訓導として桑江好孝（在任1887年2月～88年7月）、四平次郎吉（在任1888年7月～89年6月）、山崎五之介（在任1889年6月～11月）、知花真志（ちばなまし）（在任1889年11月～90年12月）、野村盛泰（在任1890年12月～91年6月）、神田千三（在任1891年6月～93年3月）が赴任している（『記念誌』16頁）。

表Ⅲ-1-04「小学教授者の類別」によると、1890（明治23）年と91年の訓導は教員免許状を有する訓導であり、1892年は卒業証書を有する訓導である。このことから、知花真志と野村盛泰が試験によって訓導免許を取得した人で、神田千三が師範学校を卒業した人だと推定できる。

また、表Ⅲ-1-05「小学教授者の年齢と勤務年限」からは、知花真志は30歳以下、野村盛泰、神田千三は31～40歳で5～10年の教員経験を持っていたものと思われる。

また、表Ⅲ-1-04からは知花・野村・神田の時期には補助教員である受業生・助手が2人いたことがわかり、彼ら補助教員は30歳以下5年未満の教職経験であったと表Ⅲ-1-05から推定できる。

▼ 学校

1883（明治16）年前後

表Ⅲ-1-11「公立小学校費の収入」1883年、読谷山をみていただきたい。前年に設立された読谷山小学校の学費817円はすべて協議集金（きょうぎしゅうきん）によってまかなわれている。協議集金とは間切番所が徴収する税金のことである。

図5を見ていただきたい。1882（明治15）年の沖縄県における協議集金の7割近くが間

*19. 前掲『記念誌』、12頁。
*20. 前掲『沖縄教育31号』、85頁。
*21. 同上、108頁。

切役人の人件費や番所や蔵元（くらもと）という役所の経費に使われていることがわかる。一方読谷山間切では教育に関する諸費の割合が沖縄県平均の2倍強であることがわかる。これは読谷山小学校が設立されたのが1882（明治15）年度であることと関連しているのかもしれない。読谷山間切の「教育に関する諸費」約836円は沖縄県全体の割合に比して高いことがわかる。

では、読谷山間切の「教育に関する諸費」はどのように使われたのであろうか。表Ⅲ-1-12「公立小学校費の支出」1883年、読谷山をみてみよう。合計額は242円である。収入が817円だが、支出は242円である。242円中、146円は給料すなわち人件費である。では収入と支出の差し引き575円をどのように考えればいいのであろうか。

『記念誌』*22によると、1883年喜名に敷地480坪、教室2室28坪、その他15坪の校舎が新築されている。新築に使われた費用であったのだろうか。

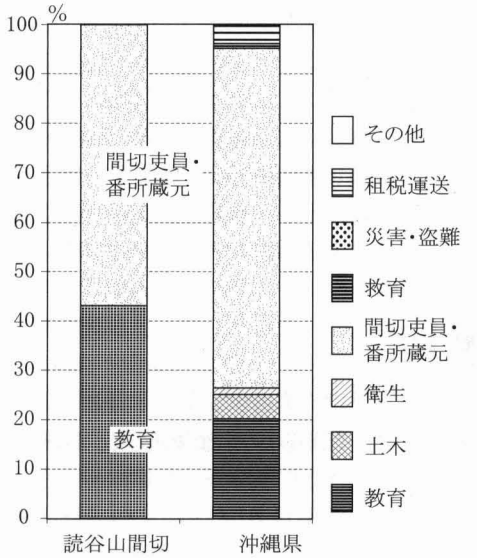


図5 間切協議費（協議集金）にしめる「教育に関する諸費」の割合

資料：『沖縄県史』第20巻「沖縄県統計」406、408頁より作成

また就学者に対して与えられた麦2俵ないし3俵を含んでいると考えることもできる。

『記念誌』*23によると、1885（明治18）年より「学校経費は予算を組み立つる事となり、予算476円90銭をもって経営し、467円50銭の決算を得たり」という記述がある。この記述から考えてみると、1885年以前は予算決算をくみたてていなかったので、収入支出総額におおきなズレがあったのである。1890年以後は、収入の8割以上で支出が組み立てられていることからも、予算の組み立てがはかられたことがわかる。

1890（明治23）～1892年

表Ⅲ-1-11の1890～1892年をみていただきたい。小学校費収入の大部分を占めていた協議集金という名称はなくなり、替わって公費という名称が登場する。公費も協議集金と同様、間切番所が間切の人々から徴収した税金である。1889年度における読谷山間切の公費徴収の仕方は、戸数割133円、持地割454円、貢納高割1,023円、その他72円、計1,682円であった。ちなみにこの年1889年度における読谷山間切の教育関連に費やした支出は383円である。この数字は表Ⅲ-1-11「公立小学校費の収入」1890年、読谷山の公費と一致している*24。

また、1890年には授業料という項目も新設されている。授業料22円が就学者186人から徴収されたものと思われる。1人あたり年間約12銭になる。公費383円、授業料22円、計405円が1890年度教育のために人々から徴収した額になる。

1890年度の支出は395円、内360円が給料関係の支出である（表Ⅲ-1-12）。次年度1891年度の繰越高は1890年度の徴収残額10円と前年度繰越金80円とを併せて90円となるはずなのに243円とあり、153円も多く数字があわない。

*22. 前掲『記念誌』、11頁。
*23. 同上、12頁。
*24. 『沖縄県史』第20巻、319頁、409頁。

表Ⅲ-1-10　公立小学校《読谷山 1911 ～ 1915》

校名		尋常高等ノ区分	教室坪数	学級数	修業年限	教員 正教員 男	教員 正教員 女	教員 准教員 男	教員 准教員 女	教員 代用教員 男	教員 代用教員 女
読谷山尋常高等小学校	1911(明44)	尋常科	288.00	14	6	6	1	2	－	2	1
		高等科			2						
	1913(大 2)	尋常科	199	11	※	4	2	2	2	1	－
		高等科	－	2	※	2	－	－	－	－	2
	1914(　3)	尋常科	139	7	※	4	2	1	1	－	1
		高等科	－	2	※	1	－	－	－	1	－
	1915(　4)	尋常科	153	8	※	4	2	1	1	1	－
		高等科		2	※	2	－	－	－	－	－
		喜納分教場	60	4	※	1	1	1	－	－	－
渡慶次尋常小学校	1911(明44)	尋常科	178.00	12	6	6	1	1	1	1	2
	1913(大 2)	尋常科	178	10	※	8	－	－	2	－	1
	1914(　3)	尋常科	168	8	※	6	－	－	1	1	1
	1915(　4)	尋常科	151	10	※	7	2	－	1	－	－
古堅尋常小学校	1911(明44)	尋常科	96.00	11	6	6	－	1	2	1	1
	1913(大 2)	尋常科	159	10	※	6	1	－	2	1	1
	1914(　3)	尋常科	159	10	※	7	1	－	1	－	1
	1915(　4)	尋常科	159	10	※	6	2	－	1	1	－

校名		児童 学齢 男	児童 学齢 女	児童 学齢外 男	児童 学齢外 女	日々出席児童平均	日々欠席児童平均	卒業者 男	卒業者 女	学校長
読谷山尋常高等小学校	1911(明44)	364	294	－	－	722.99	35.55	96	74	八巻太一
	1913(大 2)	318	304	－	－	※	※	47	46	八巻太一
		29	5	15	5	※	※	10	5	
	1914(　3)	244	236	3	－	※	※	50	36	八巻太一
		34	9	27	1	※	※	24	－	同
	1915(　4)	259	239	－	1	※	※	49	47	八巻太一
		21	6	29	7	※	※	22	5	同
		87	80	－	－	※	※	－	－	同
渡慶次尋常小学校	1911(明44)	316	295	－	－	597.98	14.62	42	36	新垣亀次郎
	1913(大 2)	303	296	－	1	※	※	48	45	渡口蒲戸
	1914(　3)	295	283	－	－	※	※	42	45	福原兼固
	1915(　4)	304	328	3	2	※	※	40	46	福原兼固
古堅尋常小学校	1911(明44)	291	285	－	－	533.31	33.69	31	34	成富敬吉
	1913(大 2)	305	298	2	－	※	※	45	40	成富敬吉
	1914(　3)	304	296	2	1	※	※	35	47	成富敬吉
	1915(　4)	314	306	3	2	※	※	44	48	成富敬吉

注 1）他に「所在地」の項目があり、いずれも「読谷山村」が記載されている。本表では省略した。

下段に続く

表Ⅲ-1-11　公立小学校費の収入《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

		前年より越高	協議集金	公費	寄付金	授業料	補助金	積金利子	雑入金	総数
										円
読谷山	1883(明16)	－	817	※	－	－	－	－	－	817
	1890(　23)	80	※	383	－	22	－	－	－	485
	1891(　24)	243	※	349	－	29	32	－	－	653
	1892(　25)	99	※	1,940	－	32	32	－	69	2,172
沖縄県	1883(明16)	8,559	11,283	※	964	－	1,492	171	532	23,001
	1890(　23)	8,713	※	23,397	1,088	1,523	4,942	1,031	935	41,629
	1891(　24)	15,567	※	26,697	1,206	1,634	6,341	926	659	53,030
	1892(　25)	9,097	※	44,564	4,599	1,458	6,308	2,280	12,330	80,636

注 1）沖縄県 1890 年の「総数」の値は、正誤表により訂正した。

1891 年度の単年度収入は公費 349 円（前年比 -34 円）、授業料 29 円（前年比＋ 7 円）、補助金 32 円（前年比＋ 32 円）、計 410 円である。前年度なかった補助金が出現している。

補助金は沖縄各間切・島が 1885（明治 18）年内務省に対して要求し、5 か年期限で国庫補助として成立したものである。各小学校に一律 50 円が支給された。5 か年支給された後、1890（明治 23）年度は 1 年延期された。

1891 年から 5 か年は地方費から総額 3,050 円が支出され、学校数で均分された*25。したがって、1891 年度、93 校に均分された補助金は 32.795 円であった。あくる 1892 年度、94 校に均分された補助金は 32.446 円であった*26。

前述してきたように、1890 年度には、読谷山間切にも 1 学校あたり 50 円の補助金があってしかるべきなのに、表Ⅲ-1-11 に記されていない。

なお、首里・那覇では、学校収入の大部分を占める協議集金・公費という間切から徴収する税金から教育費を支出していなかった。教育費は国からの補助金が担っていたのである*27。この補助金は旧首里王府直属学校の教員給料という旧慣を引き継ぐもので、首里那覇併せて 1891 年度は 3,089 円であった。*28

読谷山間切 1891 年度の支出総額は 536 円、内 313 円（前年比 -47 円）が給料関係の支出である。前述したように単年度の収入は 410 円である。単年度でいえば 126 円不足することになる。前年度になかった旅費が 113 円と、支出を押し上げていることがわかる（表Ⅲ-1-12）。

この 1892 年度の繰越高は、1891 年度の不足額 126 円を前年度繰越金 243 円でうめれば、繰越高は 117 円となるはずなのに 99 円と、18 円少ない。ここでも繰越高は数字があわない。

前年度の繰越高は単純に教育費だけで決定されるものではなく、間切全体の財政と関連するものであったのかもしれない。

1892 年度は公費 1,940 円（前年比＋ 1,591 円）、授業料 32 円（前年比＋ 3 円）、補助金 32 円（前年比± 0 円）、雑入金 69 円（前年比＋ 69 円）、単年度収入は計 2,073 円である。繰越高を加算すると 2,172 円となる。支出は 2,142 円、給料関係が 179 円（前年比 -134 円）、旅費 70 円（前年比 -43 円）と減少した。前年度 6 円であった営繕費が 1,773 円と大幅に増加した。1889（明治 22）年度における読谷山間切公費徴収額 1,682 円を上回る額である。1,773 円・営繕費とあるが、これはこの年

*25.『沖縄県史』第 4 巻「教育」、227 頁。
*26. 同上、228 頁。
*27.『沖縄県史』第 20 巻、798 頁、805 頁。
*28. 注 25 に同じ、228 頁。
*29. 前掲『記念誌』、12 頁。

表Ⅲ-1-12　公立小学校費の支出《読谷山、沖縄県 1883、1890 ～ 1892》

		教授者給料	其他諸給料	旅費	借地借家費	書籍器械器具費	薪炭油費	栄繕費	雑費	総数
										円
読谷山	1883（明16）	101	45	5	－	15	4	63	9	242
	1890（　23）	227	133	－	－	8	－	3	24	395
	1891（　24）	281	32	113	－	44	－	6	60	536
	1892（　25）	108	71	70	－	10	－	1, 773	110	2, 142
沖縄県	1883（明16）	6, 895	2, 743	389	21	1, 336	347	1, 490	2, 546	15, 767
	1890（　23）	17, 415	4, 135	1, 374	193	3, 177	340	2, 618	2, 913	32, 165
	1891（　24）	20, 448	5, 244	1, 552	230	3, 286	347	6, 669	6, 033	43, 809
	1892（　25）	20, 962	5, 375	3, 068	235	2, 507	496	19, 336	4, 309	56, 288

改築された読谷山尋常小学校校舎新築のための費用と考えられる。

また給料関係が減少したのは、訓導１人・補助教員２人という体制は変わらないこと、訓導・神田千三が師範学校卒業者で 30 代であることから考えてみると、校舎改築費用捻出のための人件費抑制であったと考えられる。

ちなみに、1892（明治 25）年 12 月 24 日新校舎（103.5 坪）は落成している*29。

第２節　読谷山間切３小学校時代

1895（明治 28）年、渡慶次・古堅両分校が設立され、1902（明治 35）年両分校は尋常小学校として独立した。読谷山尋常高等小学校の校区は伊良皆、座喜味、上地、波平、字長田、字ウヤシの４か村２字、渡慶次尋常小学校の校区は高志保、渡慶次、儀間、宇座、瀬名波、長浜の６か村、古堅尋常小学校の校区は比謝、大湾、古堅、渡具知、楚辺、字牧原の５か村１字であった。

２校独立直前の 1901 年における読谷山尋常小学校（分校を含む）の就学率は 71.7％（男 95.8、女 55.3）であり、中頭郡 13 校中 10 番目であった*30。ところが、1902 年の読谷山間切３学校の就学状況は図６の通りほぼ 100％に達したのである。この数字を達成するために間切長比嘉自作（ひがじさく）及び学務委員與儀幸吉は、新年早々十数名の村頭をひきいて、就学督促（とくそく）のため奔走したという*31。したがって強引な勧誘によって学校につれてこられた子供は教科書・石盤（せきばん）を持たないものも多く、６歳や 14・5 歳のものもいたという。

また、ある家には毎日先生が来て、無理につれて行き、家の手伝いをさせることも出来ず、困るものも出てくるという有様であったという*32。

その後読谷山間切の就学率は 1907（明治 40）年 96.88％*33、1910 年 98.32％*34、1916（大正５）年 96.96％*35 と、無理矢理就学させたのではない数字に落ち着いていく。

沖縄県および読谷山村における就学率の推移は図６の通りである。1892 年、読谷山尋常小学校に新校舎ができるが就学率は増えるどころか減っている。そう考えると就学率は分校が 1895（明治 28）年にできるまでは低かったと推定できる。分校ができた６年後、分校が独立する１年前の 1901 年には、沖縄県平均をすでに追い越していた。

２校独立後は読谷山間切の３校が原勝負（ハルスープ）的競い合いによって、沖縄平均を上回る高い就学率をあげるようになったのではないかと、後で示す出席率をあげる取り組みから想定できる。

代わって問題になってくるのが、就学した

*30. 明治 34 年５月現在中頭郡各小学校学事調査表、「琉球教育 67 号」。
*31. 琉球新報 1902（明治 35）年２月７日「読谷山だより」。
*32. 琉球新報 1902（明治 35）年５月９日「読谷山の学事」。
*33. 琉球新報 1907（明治 40）年５月 31 日「中頭郡各間切の就学歩合」。
*34. 琉球新報 1910（明治 43）年６月 30 日「中頭郡児童就学歩合」。
*35. 琉球新報 1917（大正６）年３月６日「読谷山だより」。

が欠席が多いという問題であった。学校ごとに出席率を争わせるということが出現している。1904（明治37）年6月16日から30日までの、15日間の調査による読谷山3小学校の出席率は図7の通りである。中頭19校中読谷山尋常小学校は8位、渡慶次尋常小学校は5位、古堅尋常小学校は11位であり、間切全体では94.92%、中頭10間切中1位であった。

出席率をあげるために、村単位で出席率を競わせる出席奨励会を開いた*36。また耕作当、議員、組頭臨席のもと、奨励旗を授与した*37。時には、出席率1位の村に対して、負けた村がお辞儀をするという原勝負を思わせるような取り組みが行われた*38。さらには97%を下回った字には制裁が行われた*39。このような取り組みの成果として、1907年4月渡慶次小学校では出席率が99%を超えたという*40。

表Ⅲ-1-10をみていただきたい。1911（明治44）年、1913（大正2）～1915年までの3小学校の様子がわかる統計である。

次に、表Ⅲ-1-10から作成した読谷山尋常高等小学校の児童数の変化を表した図8をみていただきたい。1911年は尋常科と高等科の児童数の内訳が不明であるが、658人の中に高等科の児童は含まれている。そう考えると1913年から1914年にかけての130人を越える尋常科の生徒の減少は不自然である。130人余の減少は4学級、4人の教員の減少をもたらしている。また、尋常科の卒業生は93人で、1人も入学生がいなかったとして、在校生も減少したと考えざるをえない数字が130人余の減少である。1912（明治45）年、読谷山尋常

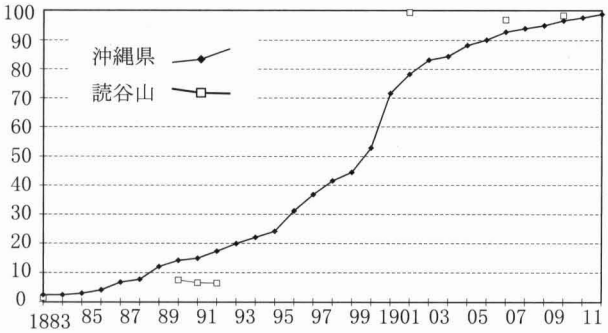


図6 就学率の変化

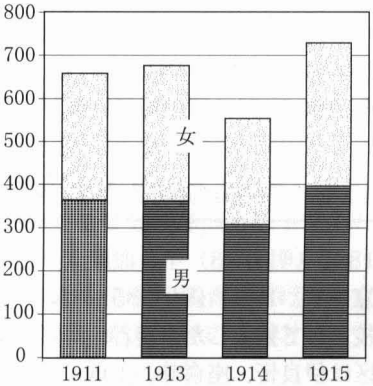


図8 読谷山小学校児童数の推移（1911～1915）

	児童数			出席率		
	男	女	計	男	女	計
読谷山尋常小学校	251	235	486	95.37%	95.12%	95.25%
渡慶次尋常小学校	246	274	520	96.97%	94.92%	95.10%
古堅尋常小学校	172	195	367	94.99%	91.44%	95.89%

図7 読谷山間切三校の出席率

資料：琉球新報 明治37年7月23日中頭郡の児童出席表より作成

*36. 琉球新報 1907（明治40）年3月5日「渡慶次校の出席奨励会」。
*37. 琉球新報 1907（明治40）年3月21日「読谷山通信」。
*38. 沖縄毎日 1909（明治42）年7月14日「読谷山通信」。
*39. 琉球新報 1912（明治45）年6月4日「森山校長の談片」。
*40. 琉球新報 1907（明治40）年4月9日「渡慶次校の出席奨励会」。

高等小学校は喜名から座喜味に校舎を移している。総計費は9,774.925円であったという*41。移転による校区変更があったのかもしれないが、渡慶次小学校は22人の減少、古堅小学校は2名の減少と、増加した形跡がみられない。また、読谷山尋常高等小学校は喜名に分教場(ぶんきょうじょう)を残していたが*42、その児童数分が減少したのであろうか。通常、分教場は本校に含まれていたと考えるのが妥当であろうし、含まれていないならば分校という項目を統計の中に設けるのが妥当であろう。

次に古堅小学校の教室坪数に注目していただきたい。1911年から13年の間に96坪から159坪に増加している。学級数が増えているわけではない。かえって11学級から10学級へ減少している。あくる1912年には古堅小学校は12学級あり、内5学級は民家を借りており、増築する予定であったという*43。おそらく、増築によって坪数が増えたものと推定できる。

最後に表Ⅲ-1-10、1911年の「日々出席児童平均」をみていただきたい。読谷山尋常高等小学校が722.99、渡慶次尋常小学校が597.98、古堅尋常小学校が533.31である。百分率では表されていない。出席の割合を百分率で表すと読谷山尋常高等小学校が95.31%、渡慶次尋常小学校が97.61%、古堅尋常小学校が92.59%ということになる。1904(明治37)年と同様の傾向を示している。

この表Ⅲ-1-10以後の戦前に関る読谷山に関するまとまった教育統計を見いだすことはできない。

また、就学率や出席率そのものが90%を越え、学校も整備されてくると、ここで論じた項目の統計には、教育課題としては意味を見出せなくなったともいえよう。

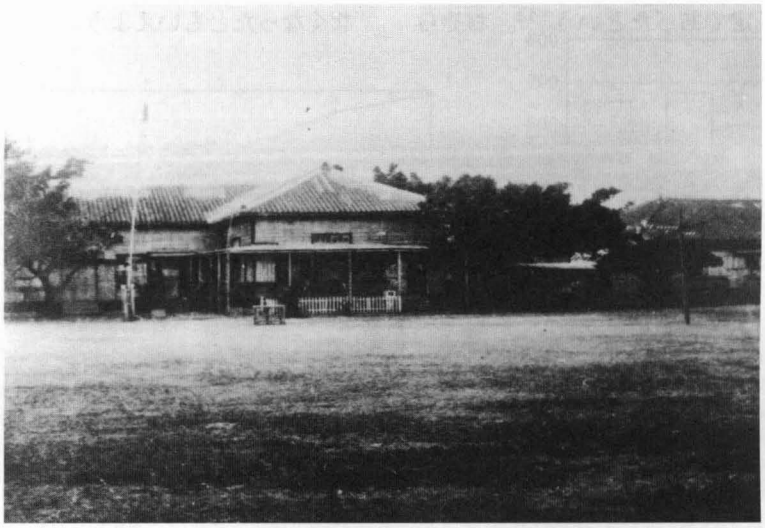
1938(昭和13)年読谷山尋常高等小学校尋常科卒業生

*41. 沖縄毎日1912(明治45)年5月29日「読谷山校落成式」。

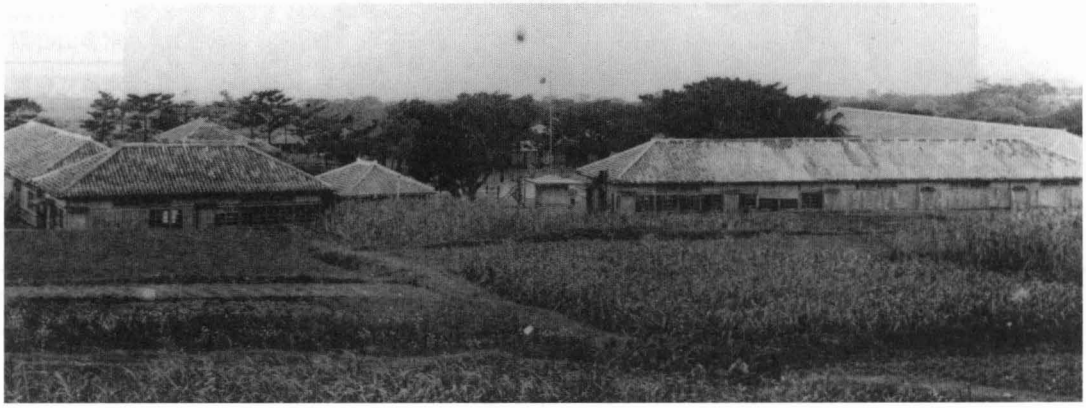
*42. 琉球新報1914(大正3)年9月22日「読谷山青年会」喜名分教場教員病死の記事、曽根信一「読谷山の学校史」読谷村史研究資料NO26、39頁。

*43. 琉球新報1912(明治45)年6月1日「森山校長の談片」。

読谷山尋常高等小学校の教職員 1940（昭和 15）年



読谷山尋常高等小学校 1941（昭和 16）年頃



渡慶次尋常高等小学校　1938（昭和 13）年『卒業記念写真帖』より